

新ひだか町の農業2023（令和5年）

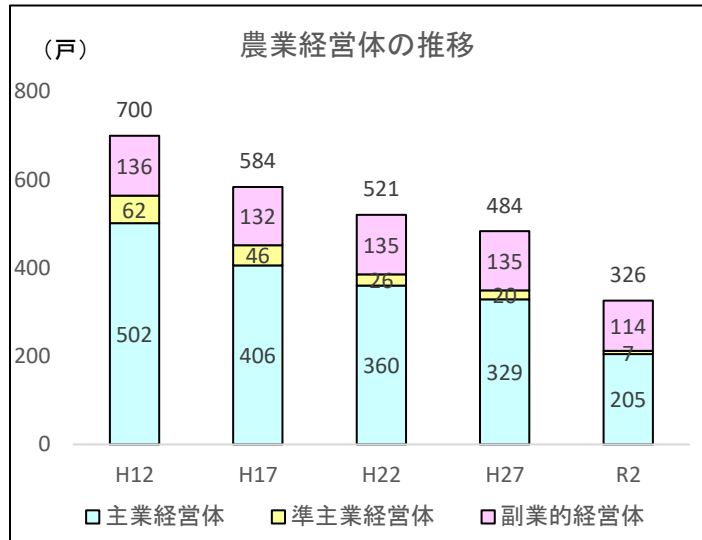
1 農家戸数等

農家戸数、農家人口は共に減少傾向にあり、平成12年の700戸の農業経営体は令和2年では326戸となり、10年前と比較し374戸が減少しています。特に71.7%占めていた平成12年の主業経営体は、令和2年では62.9%とこの10年間で8.8ポイント減少しています。

農家人口は、平成12年の2,823人が令和2年には978人となり、10年前と比較し1,845人が減少し、34.6%の減少率となっています。

農業就業人口（自営農業を主として従事した世帯員数）は、平成12年の1,772人が令和2年には659人となり、1,113人が減少し、37.2%の減少率となっています。

また、そのうち65歳以上の割合が45.7%を占め、就業者の高齢化が進んでいることがいえます。



資料：農林業センサス ※令和2年から個人経営体

農家戸数及び農業就業人口等の推移

区分	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	2年/12年
販売農家戸数(戸)	700	584	521	484	326	46.6%
農家人口(人)	2,823	2,243	1,837	1,557	978	34.6%
農業就業人口(人)	1,772	1,405	1,254	1,090	659	37.2%
うち65歳以上割合	36.5%	34.9%	38.7%	40.3%	45.7%	-

資料：農林業センサス ※令和2年から個人経営体の数値

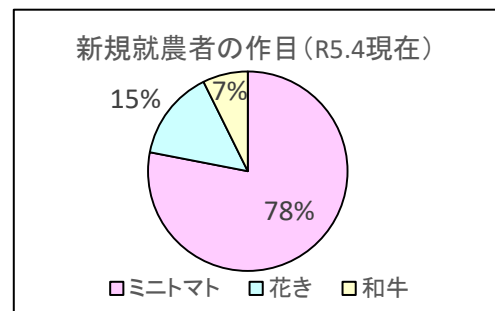
新規就農者の状況は、町の振興作目を「ミニトマト・花き・和牛」としていることから、この作目での就農者となっています。

本格的に新規就農者の受入体制を構築した平成25年から令和5年までの就農者は41名となり、そのうち新規参入者は36名、親元就農は5名となっています。作目別では、ミニトマト32名、花き6名、和牛3名となっており、78%がミニトマトの就農者となっています。

新規就農者数の推移

区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	計
新規参入	1	1	3	5	5	5	4	2	3	3	4	36
親元就農	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	5
計	1	1	3	5	7	8	4	2	3	3	4	41

資料：農政課調



資料：農政課調

2 耕地面積

令和2年の耕地面積は、9,160ha（田14.6%、畑85.4%）で、15年前の平成17年と比較して約3%の減少となっています。内訳としては、畑が100.8%と増加しているのに対し、田は86.5%で、田の減少が進行している状況にあります。

区分	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	2年/17年
耕地面積	9,310	9,260	9,180	9,160	98.4%
田	1,550	1,540	1,460	1,340	86.5%
畑	7,760	7,720	7,720	7,820	100.8%

資料：耕地及び作付面積調査

3 経営規模

令和2年の1戸あたりの平均経営耕地面積は、約17haで、全道平均の約30haを大幅に下回っています。

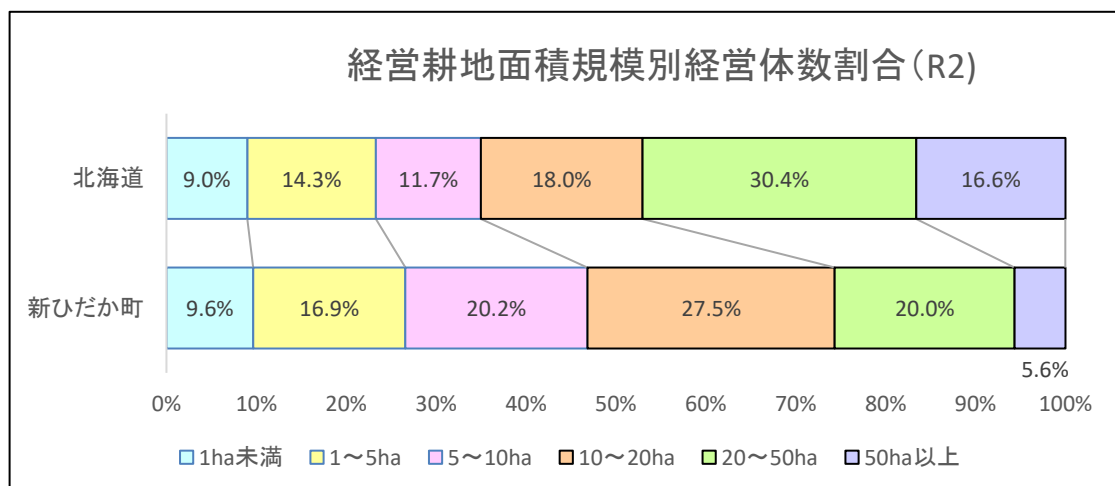
特に、10ha～20haの階層が117戸で最も多く、全戸数の27.5%を占めていますが、20ha以下の階層でみると316戸で74.3%と北海道の53.0%と比較すると中小規模経営の農家が多いことがいえます。

また、農家戸数が減少している一方で、1戸当たりの経営面積が増えており、離農等に伴う軽種馬農家や肉用牛農家への農地の集積が進んでいる状況にあります。

経営規模別農家戸数の割合（農業経営体総数） (戸)

	1ha未満	1～5ha	5～10ha	10～20ha	20～50ha	50ha以上	計
新ひだか町	41	72	86	117	85	24	425
北海道	3,141	4,992	4,080	6,280	10,626	5,794	34,913

資料：2020農林業センサス



資料：2020農林業センサス

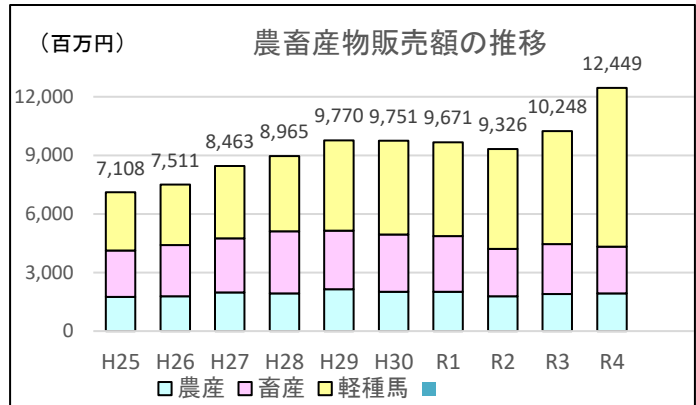
4 農業生産

農畜産物の販売額は、令和2年までは平成29年の9,770百万円をピークに減少傾向にありましたが、令和3年から増加に転向し令和4年では12,449百万円でこの10年間では最も高い販売額となり、その要因は軽種馬の販売額が大きく伸びたことが挙げられます。

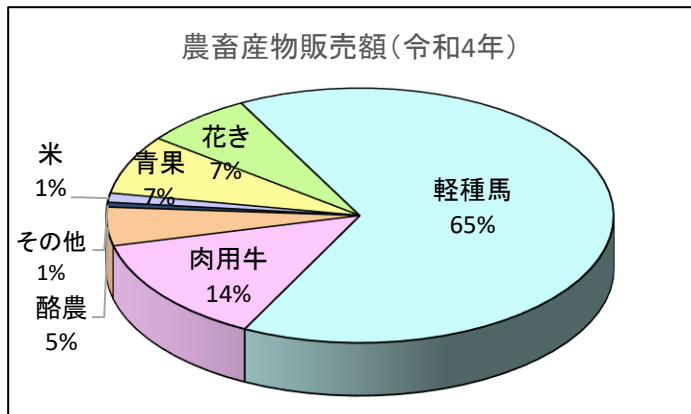
内訳としては、軽種馬がその65%を占め、次に肉用牛（肥育・育成）が14%、酪農が5%となっており、畜産が全体の84%を占めています。農産はミニトマトを主力とする青果と花きが主な農産物で14%を占めています。

令和4年の主な農畜産物の生産・販売状況は、新型コロナウイルスが収束しない中、ウクライナ情勢や円安の影響により燃料・肥料・飼料等が高騰し、農業経営に大きな打撃が見られました。

そのような状況下においても軽種馬については、中央競馬、地方競馬の馬券発売の好調で、中でもホッカイドウ競馬においては昨年の過去最高を更新する発売額となりました。さらに北海道市場では3年連続で売却総額レコードの更新となりました。



資料: JA調(みついし・しずない)



資料: JA調(みついし・しずない)

主な農畜産物の生産・販売状況

区分	令和4年		令和3年		増減	
	生産量	販売額	生産量	販売額	生産量	販売額
	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)
米	12,058 俵	144,330	14,726 俵	170,240	△ 2,668 俵	△ 25,910
ミニトマト	1,200 t	838,235	1,277 t	846,661	△ 77 t	△ 8,426
トマト	107,208 kg	35,169	94,272 kg	29,290	12,936 kg	5,879
胡瓜	53,660 kg	16,244	42,110 kg	11,878	11,550 kg	4,366
ほうれん草	46,980 kg	24,996	72,168 kg	35,954	△ 25,188 kg	△ 10,958
花き	6,780 千本	859,391	6,928 千本	785,720	△ 148 千本	73,671
アスパラ	12,074 kg	16,260	13,974 kg	19,588	△ 1,900 kg	△ 3,328
農産計	-	1,934,625	-	1,899,331	-	35,294
生乳	6,389 t	608,064	6,191 t	584,030	198 t	24,034
肉用牛(育成)	1,564 頭	1,072,211	1,630 頭	1,210,674	△ 66 頭	△ 138,463
肉用牛(肥育)	490 頭	632,061	495 頭	653,015	△ 5 頭	△ 20,954
畜産計	-	2,312,336	-	2,447,719	-	△ 135,383
農畜産合計	-	4,246,961	-	4,347,050	-	△ 100,089
軽種馬	720 頭	8,123,280	666 頭	6,352,250	54 頭	1,771,030
総合計	-	12,370,241	-	10,699,300	-	1,670,941

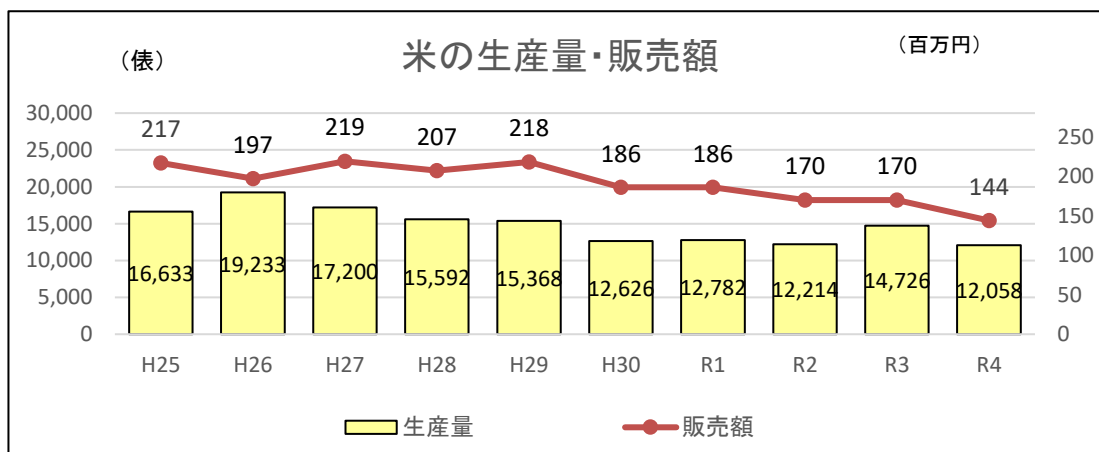
資料: JA調(みついし・しずない)

5 農畜産物の生産状況

(1) 水稲

水稲作付面積は年々減少し、令和3年の水田面積2,450haのうち、水稲作付面積は209haで転作率は9割超となり、これに伴い生産量、販売額も減少傾向にあります。

令和4年の作況指数は、北海道が106の「良」、日高管内は105の「やや良」となる平年並みでありましたが、出荷数量の1等米比率は、98.9%と全道平均（91.6%）、全国平均（78.6%）を上回る水準で品質の良い米を収穫することができました。また、米の相対取引価格は令和2年産から下落傾向にありましたが、外食需要の回復により3年ぶりの上昇となりました。また、売れる米づくりを進めるため、特別栽培米の「万馬券」（JAしずない）や低タンパク米「トキノミノル」（JAみついし）として馬産地にちなんだ独自ブランドでの販売に取り組んでいます。

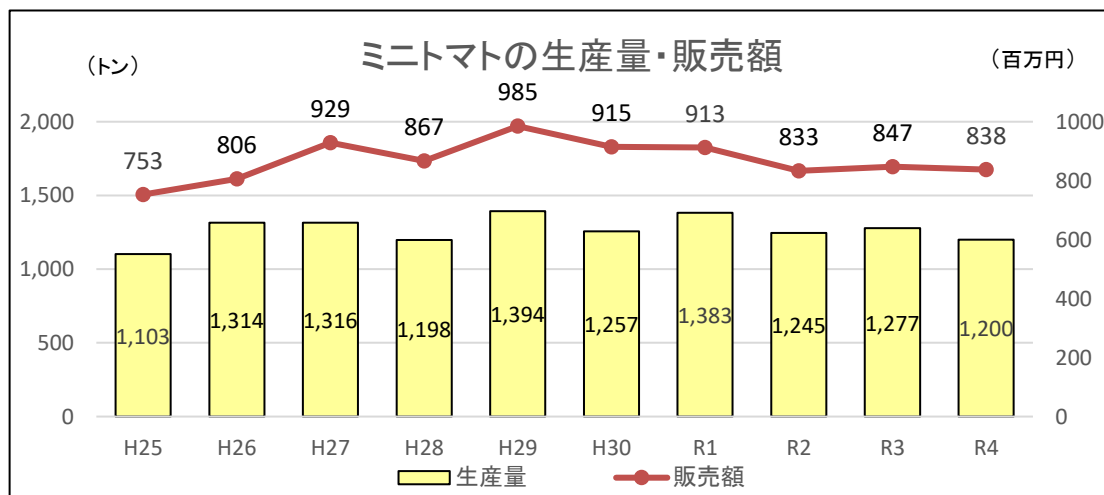


資料:JA調(みついし・しずない)

(2) ミニトマト

ミニトマトの栽培戸数、作付面積は、ここ数年は生産量、販売額共に横ばい傾向にあります。促成、半促成、抑制栽培の栽培体制を確立し、5月から11月までの安定した長期出荷体制で、キャロル10を統一品種とした「太陽の瞳」のブランド銘柄で道内外市場に出荷しています。

単価も近年は600円/kg以上と高水準を維持しており、令和4年は前年よりも36円高の699円/kgとなりましたが、6月、8月の天候不順により生産量が伸びず、販売額も前年よりも減少となりました。前年対比で生産量は94.0%、販売額は98.9%となりました。



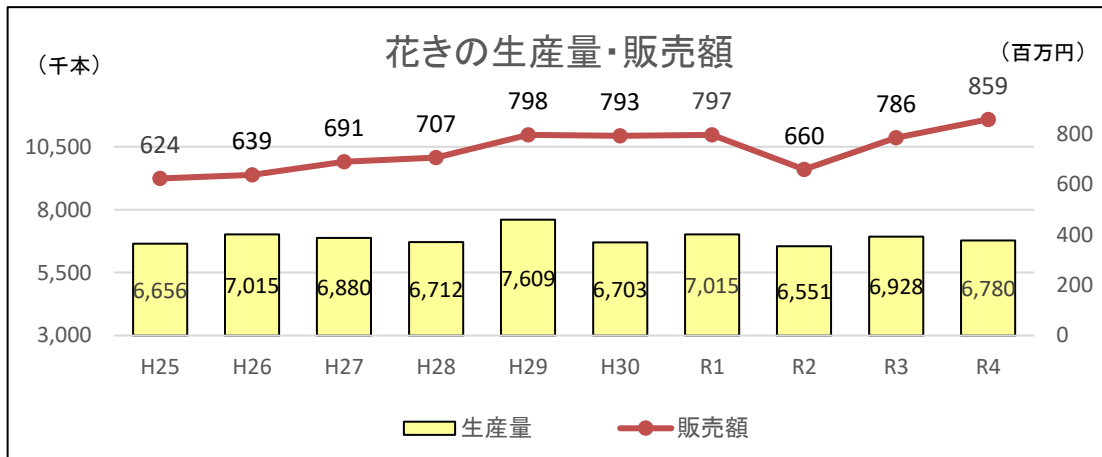
資料:JALしずない調

(3) 花き

花きは、三石地区を中心に静内地区、浦河町の栽培農家による広域出荷体制で定時定量出荷を確立し、関東・関西を中心とする道内外に「みついし花だより」の統一ブランド銘柄で出荷しています。

生産する花きは、デルフィニウムをはじめ、スターチス、ダリアやマトリカリアなどの施設花が主体となっており、全販売額の73%はデルフィニウムが占め、全国一の販売額となっています。近年は、生産量は横ばいとなっていますが、販売額は増加傾向にあります。

令和4年は、依然、新型コロナウイルスの影響により冠婚葬祭や各種イベントの自粛による花需要が落ち込む中ではありましたが、1年を通して全国的な品薄や輸入花の減少により比較的安定した相場で推移し、単価も126円/本と前年対比で111%となり、販売額も859百万円と前年対比109%で初の8億円超となりました。

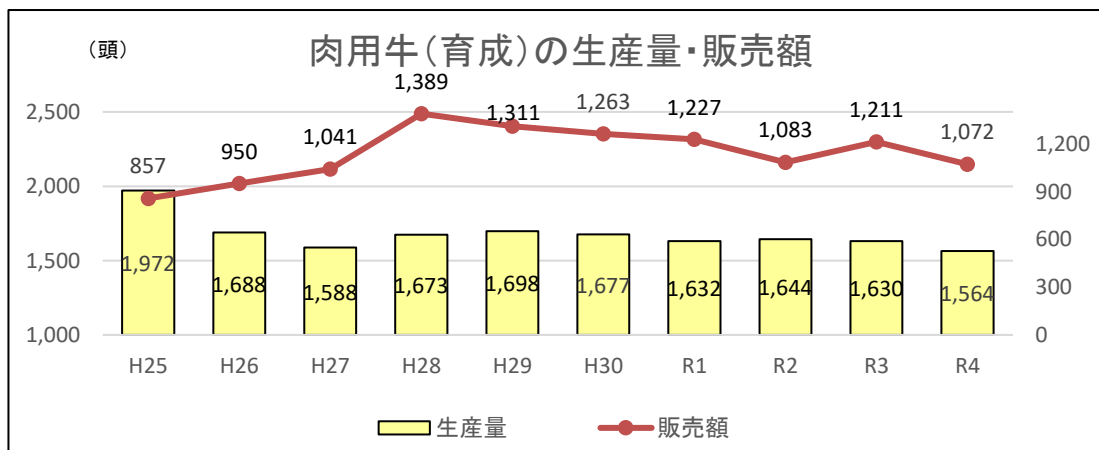


資料:JAみついし調

(4) 肉用牛 (育成)

子牛市場での出荷頭数はここ数年横ばいとなっていますが、販売金額は平成28年をピークに下落傾向にあり、併せて1頭あたりの単価も下落傾向にあります。

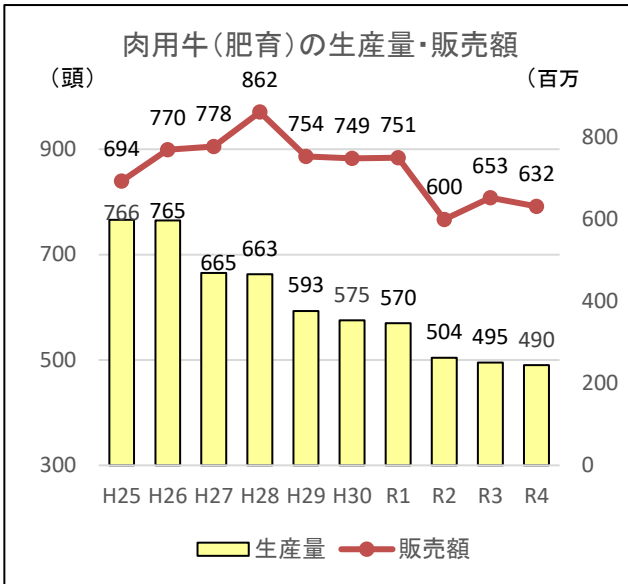
令和3年は、和牛牛肉の輸出拡大や堅調な家庭消費に支えられコロナ禍前の販売額までに回復しましたが、令和4年は、依然として新型コロナの影響や配合飼料等資材価格の高騰などによる肥育生産者の買い控えや出荷頭数の減少により、販売額は前年対比で88.5%と大幅に減少しました。1頭当たりの販売単価も685千円と前年の743千円と比較し、58千円減の92.2%となりました。



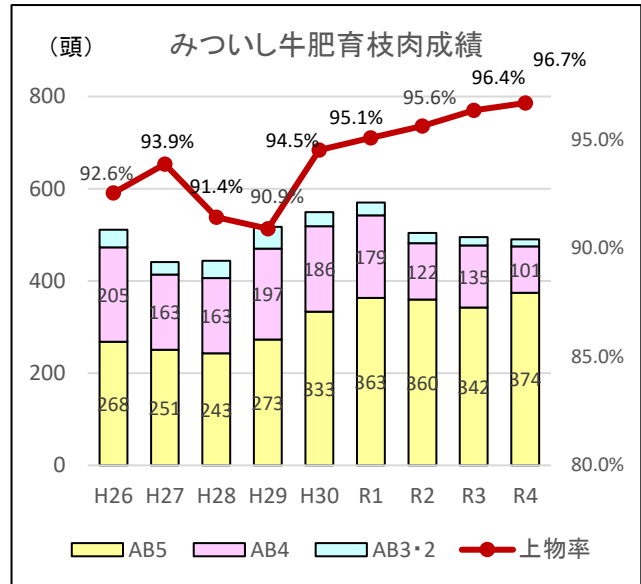
資料:JA調(みついし・しずない)

(5) 肉用牛（肥育）

肥育牛については、町内外農家による広域出荷体制を組み、一貫肥育による「みついし牛」として東京食肉市場へ出荷しています。枝肉成績の上物率は令和元年の95%超から3年連続で記録を更新し、令和4年は96.7%と昨年よりも0.3ポイント増となりました。販売額は、平成23年頃から外国人観光客の増加の連動に伴い上昇し、平成28年の862百万円をピークにその後は下降しています。令和3年にはコロナ禍の中、輸出拡大や家庭消費の拡大により、販売市況は回復基調となりましたが、令和4年は配合飼料等の生産コストの増大と飲食店需要の落ち込みなどで枝肉相場が弱含みで推移し、販売額は減少しました。生産頭数は490頭で前年対比と同水準でありましたが、販売額は前年対比で96.7%となりました。



資料: JAみついし調

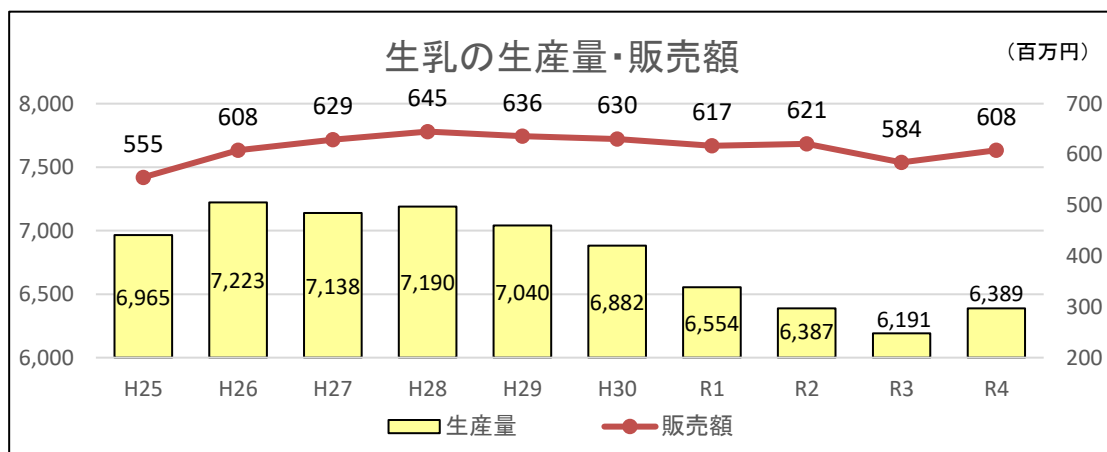


資料: JAみついし調

(6) 酪農

生産量は平成26年の7,223トンにピークに減少していましたが、令和4年は牛乳・乳製品の需給バランスの崩れにより、全国的な生乳の生産抑制をする事態である中、堅調な乳量の推移と乳価の上昇により生産量、販売額共に昨年を上回りました。生産量は6,389トンで前年対比103%、販売額は608百万円で前年対比104%となりました。

しかしながら、配合飼料、電気代等の物価高騰による生産コストの大幅な上昇や10万円程度で推移してきた初生牛販売価格も一時期は1万円を切るなど、非常に厳しい環境が続いています。



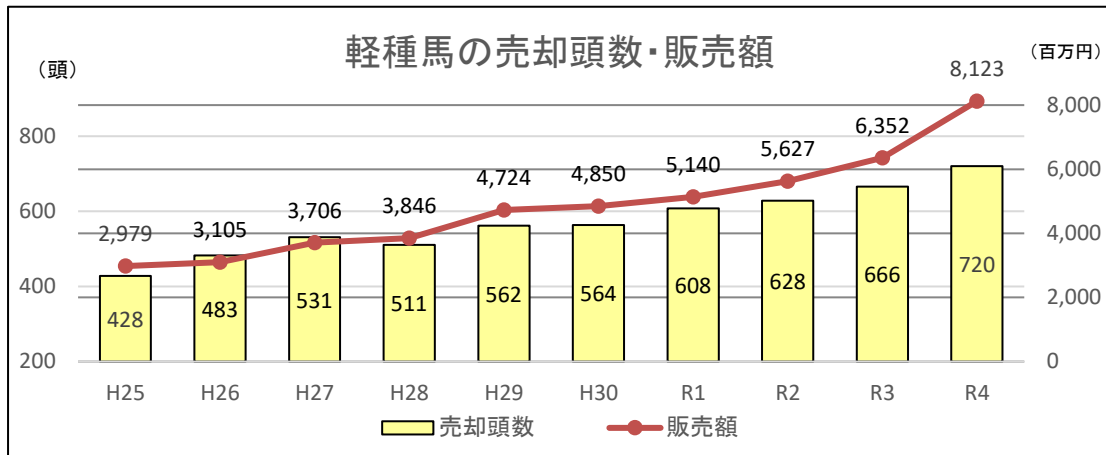
資料: JA調(みついし・しずない)

(7) 軽種馬

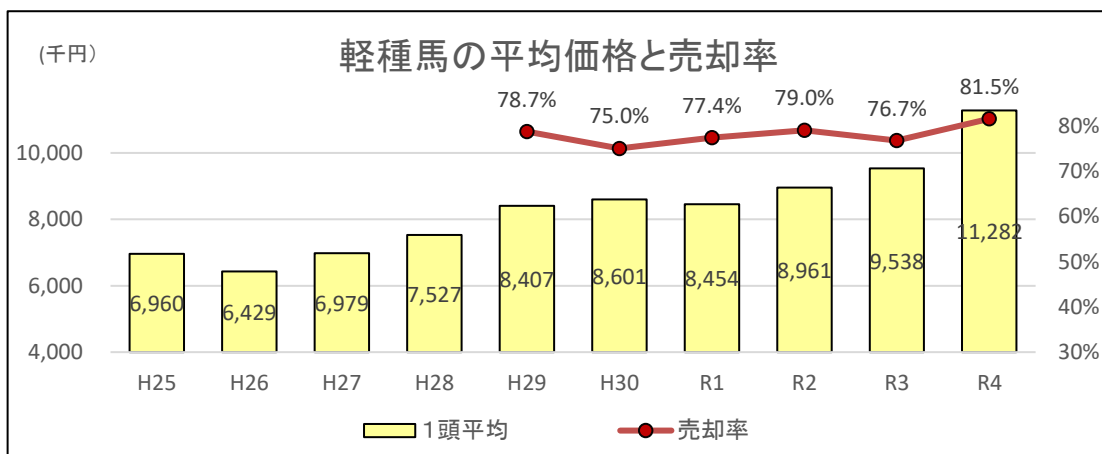
軽種馬においては、北海道市場が昨年引き続き活況となり、5回のセール売却額がすべて前年を大きく上回り、販売頭数は前年対比108%の720頭、販売額は前年対比128%の8,123百万円となり、昨年の過去最高販売額を更新しました。

また、1頭当たりの販売平均価格も上昇基調にあり、令和4年では前年対比で118%の11,282千円と、初の1,000万円超となりました。売却率も81.5%と前年より4.8ポイントの増となりました。

さらに、中央競馬、地方競馬の馬券発売も好調で、ホッカイドウ競馬にあっては、発売額が527億円で3年連続で年間発売金額レコードを更新する結果となりました。



資料: JA調(みついし・しずない)



資料: JA調(みついし・しずない)